

山に親しみ山に想う (14)

— 植村直己の故郷 —

<文・写真> =岡本=

植村直己の故郷の地を訪ねてみたいと願っていたものの、延びのびになっていた。実は、自分の誕生の地は、直己の生家と直線距離で3.2km、バス路線だと二停留所しか離れていない。子供の頃、夏休みなどに母の実家に行く時は、山陰本線江原駅からバスに乗り直己の生家の近くを何度となく通っていた。

植村直己の生家は、兵庫県城崎郡国府村上郷(かみのごう)(その後、日高町上郷となり、現在豊岡市日高町上郷)である。母の実家は、出石郡小坂村片間(その後、出石町片間となり、現在豊岡市出石町片間)で郡、町名は異なっているが、地理的に見ると標高120m程の山を境にして接しており、切り通しのような峠道で上郷とつながっている。日高町上郷は但馬平野を貫流し日本海に注ぐ円山川(まるやまがわ)の右岸に広がる米作に適した物なり豊かな地である。上郷の円山川対岸に但馬国の国府跡があるように、一帯は古代より但馬国の要衝であった。上郷よりひと山越えた片間は、出石川(いずしがわ)の左岸に位置し、出石川は3km程先で本流の円山川に注ぎ込む。



2017年6月17日、日高町の西端に聳える蘇武岳(そぶがたけ・会報2017年7月号山行報告参照)に登った翌日、植村直己の故郷を訪れた。

円山川に架かる鶴岡橋(日高町鶴岡と上郷の間に架かる。県道482号)を右岸に渡ったところが上郷である。橋を渡りきると、「植村豊株式会社」の看板と「植村直己ふるさと公園」の案内標識が目飛び込んでくる。看板の直ぐ先が生家の植村豊株式会社である。広い敷地に事務所、工場の建物がある。日曜日なので人影は全くなく、森閑としている。敷地の周りをうろついても誰にも出会わないので、仕方なく会社の外観の写真を数枚撮って「ふるさと公園」に向かった。

会社の前の舗装道路を東方向に600m程、苗が植ったばかりの青々とした田んぼの中を進むと、低い山の麓に校庭程の広場がある。広場では、上郷青年部の若者が焼きそばや焼き鳥の

仕込みなどの準備に忙しくしている。田植えが終わって骨休めを兼ねた親睦運動会が催されるようだ。広場に隣接する曹洞宗頼光寺山門横に橙色の案内「植村直己ふるさと公園」が公園入り口を指し示している。頼光寺は、山門前に「葦酒山門を入るを許さず」と刻んだ戒壇石が立っている立派な佇まいであり、上郷の豊かな檀家に支えられていることが窺える。案内に従い、寺の蓮池を過ぎると、古雅な御堂がある。御堂の横から、子供やお年寄りでも気楽に散策できるようにと緩やかにしつらえた遊歩道に従って、秋には紅葉の名所となる寺の裏山に登っていく。もみじの樹々の間より、上郷の家並みと緑の絨毯のような田んぼの広がり、その先の円山川の堤などが織りなす一幅の田舎の風景が眺められる。うっとりするほどに美しい。10分程で高さ50m程の寺の裏山に着く。

寺の裏山が「ふるさと公園」内の植村直己の墓碑があるところだ。墓域はもみじやコナラの樹木に囲まれた落ちついた空間である。中央に建つ墓碑は、直己の背丈程(注1)の自然石である。西堀榮三郎書で「植村直己之墓」と陰刻されおり、裏面にまわると、「乾坤院直心不撓居士 昭和五十九年二月十六日(注2) 寂 俗名 植村直己 行年 四十三才 藤治郎 梅ノ五男」「昭和六十一年十月吉日 兄 植村修 建之」と刻まれている。墓碑の左手、少し離れて二枚の金属板が嵌め込まれた、高さ1.2m程の自然石がある。一つの金属板には「NAOMI UEMURA A BRAVE MAN AND A GREAT ADVENTURER SIR EDMUND HILLARY (ヒラリーのサイン)」とレリーフされている(注3)。

別の金属板には「NUNATAK UEMURA 2600M 16 JUNE 1984 DENMARK(山のレリーフ) 宇宙作」と刻まれている(注4)。他に直己の経歴を書いた掲示板と金属製の記念塔が建っている。



植村直己の墓碑としては、東京板橋区の乗蓮寺に詩人草野心平の碑文が刻まれたものがあるが、上郷の墓碑は長兄修氏ら近親者の願いにより進められ、3回忌法要を終えた1986年の10月9日に、83才の高齢になられた西堀榮三郎(注5)、デンマーク大使代理らの出席を得て除幕式が行われた。場所は直己が少年の頃よく遊んだところであり、上郷が眼下に見おろせる頼光寺裏山になった。式後に植村家で催された披露宴では手作りの料理が出され好評だったが、直己の好物であった「はったい粉」だけは、不人気だったという逸話が伝えられている。墓碑に改めて合掌し、御堂まで戻ってくると、お婆さんが御堂前で掌を合わせ「ありがとうございます。ありがとうございます。」と何度も何度も、ただそれだけを繰り返しながら、

腰を何度も何度も屈めていた。植村直己に向けての「我々の気持ち」を代弁してくれているようであった。広場には既に上郷の老若男女が集い、運動会はたけなわである。直己が生存しておれば、公子夫人と子や孫を連れて帰郷し、ここに参加しているかもしれないなどと、取りとめのない妄想が頭をよぎった。（了）



(注1) 植村直己の身長は162cm、体重は57～66kg、血液型はA型、足の大きさは26.5cm

(注2) 1984年2月12日にマッキンリー冬季単独登頂に成功し、翌13日飛行機との交信を最後に消息を絶った

(注3) エドモンド ヒラリー卿は1953年5月英国のエベレスト探検隊隊員としてテンジン・ノルゲイと共にエベレスト初登頂を達成したニュージーランド出身の登山家、冒険家

(注4) 1984年6月16日デンマーク政府は、植村直己が1978年犬ぞり単独行のグリーンランド縦断で到達したヌナタック峰を「ヌナタック・ウエムラ峰」と改称した。宇宙は愛媛県八幡浜の彫刻家塩崎宇宙氏

(注5) 西堀榮三郎は元日本山岳会第13代会長、直己に六分儀等の天測装置と使用法を教えた有力な支援者

主な参考資料

- ・「弟・植村直己」植村修著 編集工房ノア 1999年4月 刊
- ・「植村直己…夢の軌跡」湯川豊著 文春文庫 20017年1月 刊
- ・「青春を山に賭けて」 植村直己著 文春文庫 2008年7月 刊